

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 24 号, 2021 年, 抜刷 (pp.1-23)

<論文>

## 後古典期のニシュトゥン・チツチ遺跡

—考古資料と文献史料から見えるチャカン・イツァー—

白鳥祐子 (日本学術振興会特別研究員PD・京都外国語大学ラテンアメリカ研究所)、ティモシー・W.・ピュー (ニューヨーク市立大学クィーンズカレッジ)

## The Postclassic Period at Nixtun-Ch'ich', Petén, Guatemala

—Views of the Postclassic Chak'an Itza from both Archaeological and Historical Data—

Yuko Shiratori (JSPS Research Fellow / Institute of Latin-American Studies of Kyoto University of Foreign Studies), Timothy W. Pugh (Queens College, City University of New York)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

&lt;論文&gt;

## 後古典期のニシュトゥン・チッチ遺跡

—考古資料と文献史料から見えるチャカン・イツァー

白鳥祐子

(日本学術振興会特別研究員 PD・京都外国語大学ラテンアメリカ研究所)

ティモシー・W.・ピュー

(ニューヨーク市立大学クィーンズカレッジ)

### 【要旨】

グアテマラ、ペテン・イツァ湖西側のカンデラリア半島にあるニシュトゥン・チッチ遺跡は、1995年から断続的に発掘調査が行われ、450を超える建造物が2.5km<sup>2</sup>の範囲で確認されている。調査の結果、先古典期から植民地期まで長期にわたっての居住が認められているが、後古典期（後950～1525年）に焦点を当ててまとめられた論文は今のところない。本稿において、筆者らはこれまでの調査結果から後古典期ニシュトゥン・チッチ遺跡の居住形態と生活様式を探る。その方法として発掘調査から得られたデータと、16～18世紀にスペイン人が作成した様々な文献史料が有効であると考え。史料によれば、ニシュトゥン・チッチ遺跡があるペテン・イツァ湖西側の地域はチャカン・イツァと呼ばれ、1697年にイツァ族の首都が征服されるまでイツァ領の一部であった。これまで語られていない17世紀以前のチャカン・イツァの復元を試みるため、発掘によって得られたデータを文献史料から読み解き、後古典期チャカン・イツァの様相を探る。

### 【キーワード】

後古典期マヤ、グアテマラ、ペテン・イツァ湖、チャカン・イツァ、建築様式、生活様式、文献史料

### 【目次】

1. はじめに
  2. ニシュトゥン・チッチ遺跡における後古典期遺構の考古学調査
  3. 17世紀イツァ族とチャカン・イツァ
  4. 考察
  5. おわりに
-

## 1. はじめに

本稿のニシュトゥン・チッチ (Nixtun-Ch'ich') 遺跡は、グアテマラ、ペテン県中央部に位置するペテン・イツァ湖 (Lago Petén Itzá) の西側に突き出たカンデラリア半島 (Península Candelaria) 上にある (図1)。遺跡の北側はカルスト丘陵、南側を狭くなった湖の入り江に挟まれ、遺跡は西から東にかけて土地が低くなっているが、ほぼ平坦な地形の上に位置している。湖からの風は強く、遺跡ではしばしば塵旋風が起ることから、ペテン・イツァ湖が「イカ (Ik'a)」、すなわち風の強い水 (Windy Water) と呼ばれた理由も納得する [Tokovinine and Zender 2013:35]。カンデラリア半島の東端には、17世紀スペイン人の史料に登場する、ニッチ (Nich) またはチッチ (Ch'ich') と呼ばれる船着き場を持つ集落があったとされる [Jones 1998; Rice 2009a]。また、カンデラリア半島の東端は17世紀から現在までプンタ・ニフトゥン (Punta Nijtún) やプンタ・ニシュトゥン (Punta Nixtun) と呼ばれていることから、カンデラリア半島の遺跡は「ニシュトゥン」と「チッチ」を組み合わせて、「ニシュトゥン・チッチ遺跡」と名付けられた [Rice 2009a]。

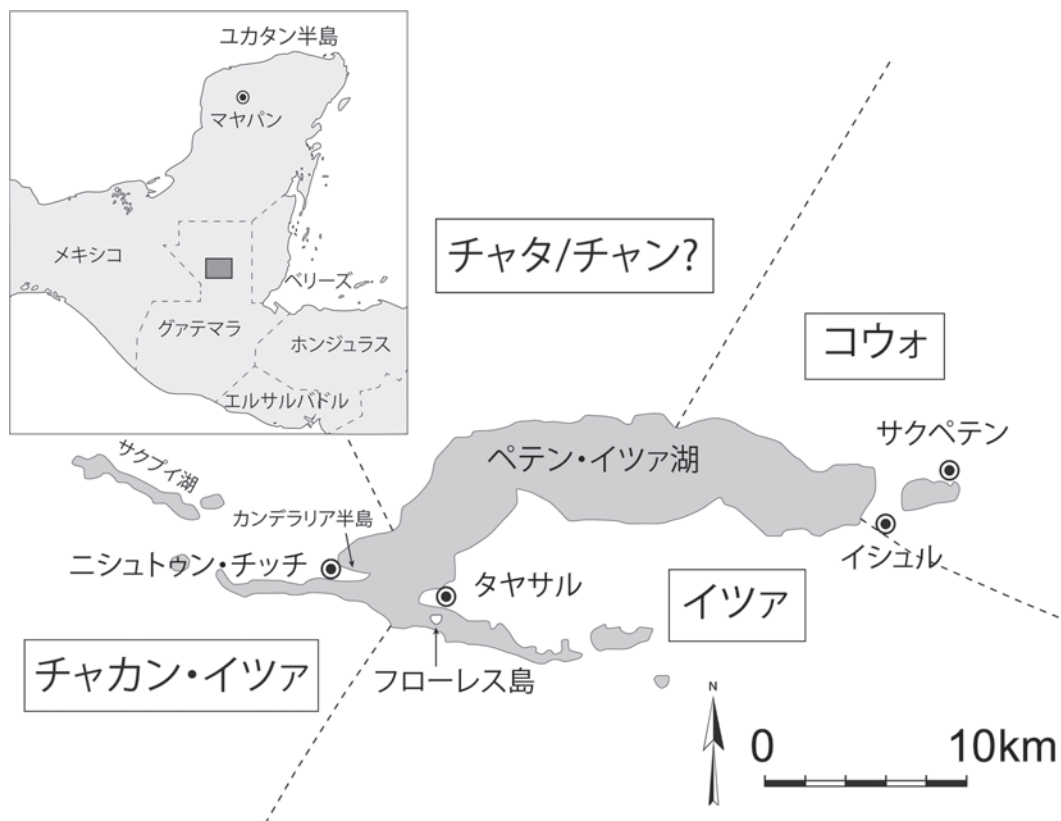


図1 グアテマラ、ペテン・イツァ湖周辺地図と17世紀イツァ族の理念的な地域区分。実線で囲まれた名称は17世紀イツァ族内の地域または集団名、丸中黒の名称は現在の遺跡名。地図内のタヤサルはタヤサル半島にある遺跡名 (Tayasal) であり、歴史文献に登場する現フローレス島にあったイツァの首都「タイツァ (Taiça/Tayza/Tahltza)」または「タヤサル (Tayasal)」とは異なる。

本稿でははじめに、ニシュトゥン・チッチ遺跡について先古典期から古典期末期までの概要を述べる。近年の

測量調査によって遺跡は約 2.5km<sup>2</sup>の広がりを持ち、中心部は約 1.1km<sup>2</sup>の中に大規模な建造物群と、マヤ地域では大変珍しいグリッド状の通路配置が確認されている(図2) [Pugh 2018; Pugh and Rice 2017; Pugh et al. 2020]。前 500 年より前に建造された通路は石敷きの上に漆喰が塗られ、周辺部よりも低く西から東へ傾斜していることから、通路兼排水路として機能していたと考えられる [Pugh and Rice 2017]。遺跡の中心部は東西軸に沿って約 21 の建造物が集中しており、南北に走る 7 本と東西に走る 6 本の通路によって少なくとも 45 区画に分割されている。それぞれの区画は台形をしており、東西の中心軸は4°7'時計回りにずれているが、東西軸を中心に南北対称である [Pugh 2019; Pugh and Rice 2017; Pugh et al. 2020]。東西軸を持つ建造物配置は、マヤ低地における先古典期の遺跡の特徴である [Estrada-Belli 2011; Hansen 2016]。中心部には先古典期の E グループが 3 つ、三神殿グループが 1 つ、そして貯水池が 2 つ確認されている。これらの建造物は炭素年代測定により、先古典期中期(前 800~400/300 年)から先古典期後期(前 400/300~後 200 年)にかけて建造されたことが確認されている [Pugh and Rice 2017]。ペテン・イツァ湖周辺では最大規模の都市であることから、先古典期のこの地域においてニシュトウン・チッチ遺跡は重要な都市であったと推測できる。



図2 カンデラリア半島上のニシュトウン・チッチ遺跡。[ピュー、ジガドワ (Pugh and Zygadlo) 作成]

中心部の建造物はカンデラリア半島の中心から西部にかけて、東側は南北に連なる建造物の周辺まで広がっている。この南北に連なる建造物は「石塁と堀複合 (wall-ditch complex)」と呼ばれ、南北に約 355m 連なっている。石塁の高さは東側の地表から 2.1m、西側の堀から 6.2m であり、堀に向かって西側急斜面はテラス状になっている [Pugh et al. 2020:252-253]。石塁と堀は先古典期の建造物であるが、遺跡中心部に向かって堀があることから、石塁が防御用なのか、また堀は水路なのか、現在のところ不明である。石塁のすぐ東側には後述するように後古典期 (950~1525 年) から接触期 (Contact Period, 1525~1697 年) <sup>(註1)</sup> の住居址があり、そこからカンデラリア半島東端の建造物群までの空間に建造物はほとんど見られない。

遺跡中心部の建造物は先古典期後期以降一旦放棄されるが、古典期後期から終末期 (600~950 年) に新たな建造物が建てられる。その 1 つが球技場である。中心部の北部に位置する球技場は I 字型をしており、先古典期の基壇上に古典期後期から終末期に建造されている [Pugh and Chan Nieto 2016:22]。球技場は南北に長く前後左右の建造物を含めると 138 x 81m あり、左右側部の建造物だけでも 71m あることから、マヤ地域ではかなり大きい球技場である。先古典期からのグリッド状の通路に沿って建造されていることから、先古典期の通路配置を残したまま、区画に沿って新たに球技場を建造したことになる。

古典期終末期に続く後古典期の居住跡は、同遺跡において広範囲に確認されているが、これまで後古典期に焦点を当てて書かれた論文は少なく、全体像が不明であった。その理由として挙げられるのは、1) これまでの調査の目的が後古典期ではなく、その後の17世紀文献史料に一致する接触期から植民地期や、大規模な建造物が造られた先古典期を対象としていたものであったこと、2) 後古典期の炭素年代が得られていなかったことがあげられる。ペテン・イツァ湖周辺遺跡では、後古典期から植民地期マヤ社会の解明を目的に、1980年代から湖東側、湖中心部と調査が行われ、2014年からは湖西側を中心に調査している [Pugh et al. 2016]。しかしながら湖西側のニシュトゥン・チッチ遺跡は先古典期の大規模建造物が多く、調査報告が先古典期中心になっている [例えば Pugh et al. 2020]。そこで本論文では、近年当該遺跡において行われた発掘調査の中でも後古典期に関する調査結果をまとめ、後古典期の居住パターンと生活様式について考察する。発掘調査から得られたデータを考察する上で、16~18世紀にスペイン人が作成した様々な文献史料が有効であると筆者らは考える。史料によれば、ニシュトゥン・チッチ遺跡があるペテン・イツァ湖西側の地域はチャカン・イツァと呼ばれ、1697年にイツァの首都が征服されるまでイツァ領の一部であった。これらの文献史料に登場するチャカン・イツァについての記述と同時期のスペイン人による文献史料を用いて、発掘調査から得られたデータの解釈を試みる。本論文は、後古典期チャカン・イツァの人々の暮らしを捉えることにより、後古典期ペテン・イツァ湖周辺地域におけるダイナミズムの一端に迫る研究として位置づけられる。

## 2. ニシュトゥン・チッチ遺跡における後古典期遺構の考古学調査

### 2-1. 調査区域

ニシュトゥン・チッチ遺跡の存在は以前から知られていたが [Chase 1983:1164-1168; Cowgill 1963:60-61; Morley 1938: Plate 181]、プロジェクト・マヤ・コロニアル (Proyecto Maya Colonial) によって1995年に初めて調査された [Rice 2009a]。調査をするにあたり、広範囲な遺跡をグリッド状の通路配置などに沿って52分割し、それぞれの区画 (セクター) にAからZZまでアルファベットが付けられた (図3) [Pugh and Rice 2017]。建造物群またはグループは区画ごとに番号が付けられ、例えばセクターPPに3つの建造物群がある場合、その建造物群はセクターPP1、PP2、PP3となる。PP3の中の同一基壇上の建造物群はPP3/1となり、PP3/1の基壇上にある建造物はPP3/1-1、PP3/1-2と表示されることになる。

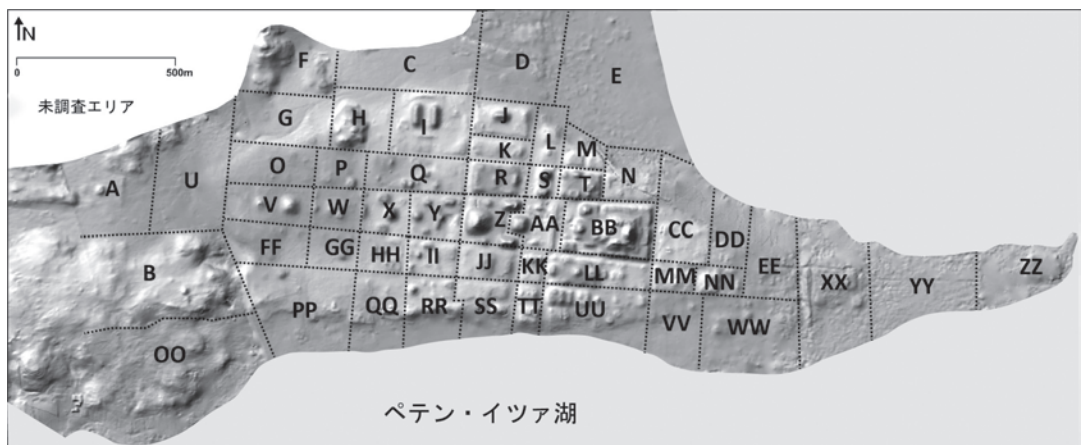


図3 52区画に分割されたニシュトゥン・チッチ遺跡。 [ピュー、ジガドワ作成]

1995年から2019年までの発掘調査において、当該遺跡における後古典期の建造物群はセクターCC、PP、QQ、WW、XX、ZZで確認されており、遺跡中心部というよりも周縁部に広がっていることがわかる(図3)。中心部でも地表面に後古典期の土器が確認されているが、居住の痕跡は今までのところ見つかっていない。上記のセクターの中でも、これまでセクターXXとZZにおいてのみ、後古典期から植民地期にかけての遺構や遺物が確認されている。本論文では後古典期以降の居住が確認された、上記6つのセクターにおける遺構と遺物を比較分析し、後古典期の居住パターンと生活様式を探る。

## 2-2 後古典期遺構が確認されたセクターの調査概要

### 2-2.1) セクターXXとZZ

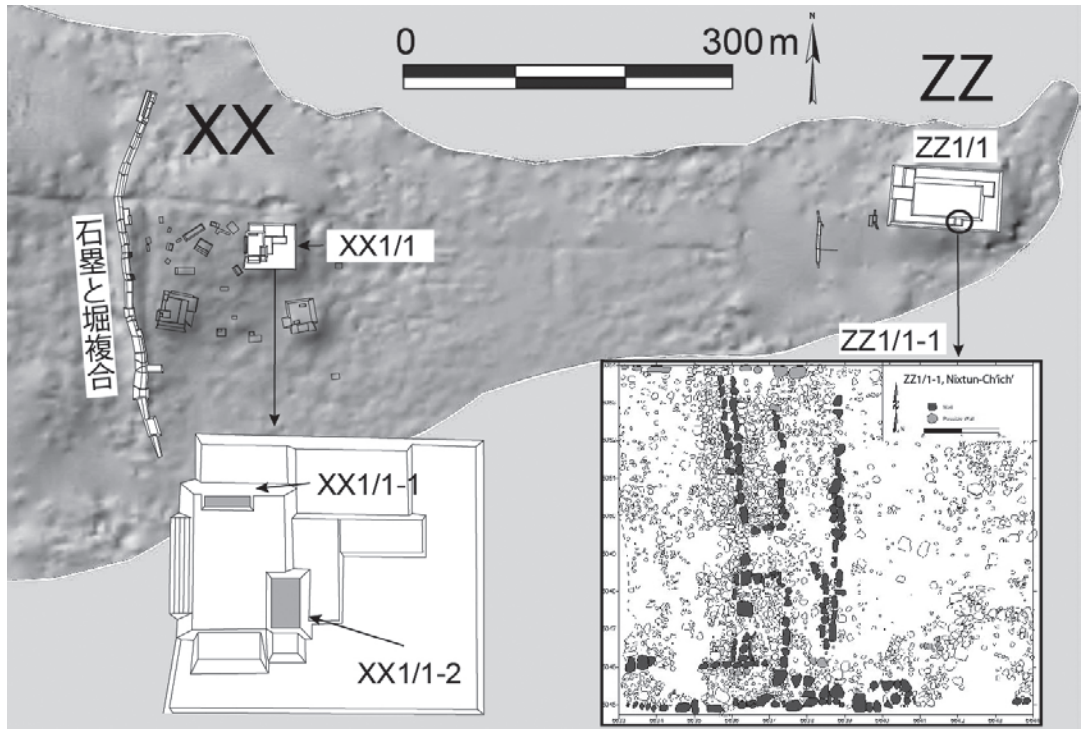


図4 遺跡東部セクターXX、ZZと建造物XX1/1、ZZ1/1-1平面図。[ベースマップ：ピュー、ジガドワ作成、測量地図、XX1/1平面図：ウォルフ(Wolf)作成、ZZ1/1-1平面図：ピュー作成]

セクターXXとZZは、遺跡の中心部より東側に位置し、セクターXXは中心部東端で、石塁と堀の複合建造物が含まれる。セクターZZはカンデラリア半島の東端で、プンタ・ニフトゥン(またはプンタ・ニシュトゥン)と呼ばれる岬がある。セクターXXの後古典期の建造物群XX1/1は60 x 60mの基壇上に少なくとも5つの建造物が確認されている(図4)。2つの主要な建造物のうち、基壇上の北部に位置するXX1/1-1は15 x 8mのコの字型をしており、基壇中央(南)に面している。おそらくコ字型の外壁に沿って室内にベンチを伴っていたと思われるが、内部はかなり浸食を受けている。建物正面には角柱の痕跡が残っており、後古典期後期(1250~1525年)に特徴的な列柱を伴ったコ字型建造物だったと推測できる。特に間口が広く横長のコ字型やL字型建造物にベンチを伴うものは、室内に屋根を支える石造や木造の柱を伴い、一般的に列柱公堂(colonnaded halls)



と呼ばれるが [Proskouriakoff 1962:91]、XX1/1-1 も列柱公堂であったと考えられる。床面は確認できなかったが、赤く塗られた漆喰の一部が見つかっている。基壇 XX1/1 の南東に位置する XX1/1-2 は約 10x7.1m の建造物で、6.3x4m の上部構造を持ち、西側に面して階段を持つ。XX1/1-2 内部は東側にベンチまたは祭壇の痕跡が見られるが、XX1/1-1 と同様に内部はかなり浸食を受けている。XX1/1-2 内部の北東隅では少し焦げた石が 3 つ囲むように見つかっていることから炉と考えられる [Rice et al. 2007]。XX1/1 において出土遺物は比較的少なく、後古典期の土器は主に後古典期後期のスリップを持たないチロ・アンスリップト (Chilo Unslipped) 型で、XX1/1-2 内部からはチロ・アンスリップトの胎土でヨーロッパ風の水差し型土器の破片が堆積して見つかった (図 5A)。土器以外では、XX1/1-1 からメキシコ中央高原パチュエカ産の緑色黒曜石や、XX1/1 基壇中央から頭部が非常に大きい釘が出土している (図 5D)。ペテン・イツァ湖周辺ではパチュエカ産緑色黒曜石の出土は大変珍しいが、出土している緑色黒曜石の多くはペテン・イツァ湖西側に集中している [Meissner 2014]。ヨーロッパ風水差型土器や釘の出土から、XX1/1 はスペイン人と接触後の 1525 年以降も使用されていたことがわかる。

セクター ZZ の東端にある ZZ1/1 は、2007 年に道路整備やホテル建設計画のため破壊の危機にあったが、緊急調査の結果、先古典期中期から植民地期まで居住が繰り返された重要な建造物だったことが明らかになり、貴重なデータが得られた [Rice 2009a; Rice et al. 2007]。ZZ1/1 は 100 x 59m の東西に延びる長方形の基壇で、2 層になっており、2006 年当時地表から 5.7m の高さをなお保っていた [Rice 2009a:404]。南側の層が低くなっており、少なくとも 2 つの建造物 (ZZ1/1-1、ZZ1/1-2) が南側の層上に確認され、2 つのうち ZZ1/1-1 が発掘調査された。ZZ1/1-1 は、8.8 x 5.25m の南北に長い長方形の建造物で、正面は東側にある (図 4)。後古典期後期の住居建築によくみられる、「タンデム式」と呼ばれる建築スタイルで、前室 (東側) と後室 (西側) がある。仕切り壁には幅 1m の出入り口がある。前室には仕切り壁に沿ってベンチが造られているが、表面漆喰は剥離したのか見つかっていない。古典期建築様式に特徴的な石灰岩の化粧板がいくつか前室と後室をつなぐ出入り口に嵌め込まれており、ペテン・イツァ湖東側の後古典期の遺跡サクペテン (Zacpetén) でも見られたように、意図的な装飾であると考えられる [Pugh 2009]。ZZ1/1-1 は正面 (東側) に長さ 4.5m の前庭パティオがあり、角礫で縁取りされている。前庭パティオはニシュトウン・チツ遺跡やイツァ領タヤサル遺跡において後古典期の住居に多く見られる。ZZ1/1-1 の北西 (裏手) からは床面に埋められた埋蔵物 (cache) と思われる完形の甕が見つかった。この土器は後古典期スリップなし土器、ポゾ・アンスリップト (Pozo Unslipped) 型で、口径が約 25cm

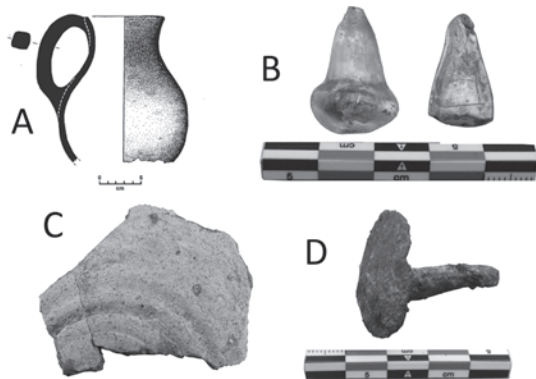


図 5 XX1/1 と ZZ1/1 出土遺物。A) XX1/1-2 出土の水差し土器 [Rice et al. 2007:Fig. 2-7 より転載]、B) ZZ1/1-1 出土のガラスビーズ、C) ZZ1/1-1 出土のオリーブ甕片、D) XX1/1 出土の釘

ある。ZZ1/1-1 の南側は斜面になっており、この斜面から大量の土器片を含む多様な遺物が出土したことから、南側がゴミ捨て場に見えるが、ZZ1/1 基壇が開発に伴いブルドーザーで削られたときに、南側斜面に土砂が押し出された可能性も示唆できる。出土遺物には、古典期終末期の長距離交易によってもたらされた搬入土器 (Fine Orange や Plumbate)、後古典期の赤色スリップ土器、複合形香炉、黒曜石やチャート製の石鏃、さらに植民地期と思われる鉄のナイフ、ガラスビーズ、マジョリカ土器やオリーブ壺の土器片が含まれていた (図 5)。ヨーロッパ製品は、1702 年に建てられたというサン・ヘロニモ教会 (Misión San Jerónimo) に関連する遺物である

と思われ(後述)、教会は削られた ZZ1/1 の上層基壇上に建っていたと考えられる [Pugh et al. 2016; Rice 2009a]。ZZ1/1-1 のタンデム式住居様式は、ペテン・イツァ湖東側コウォ (Kowoj) 領(後述)の遺跡では多く見られるが、それ以外のペテン・イツァ湖周辺遺跡では少ない [Pugh 2009:173]。基壇 ZZ1/1 の西側には防壁と思われる建造物が確認され、ZZ1/1 が重要な場所であったことが推測できる。

## 2-2.2) セクターCC と WW

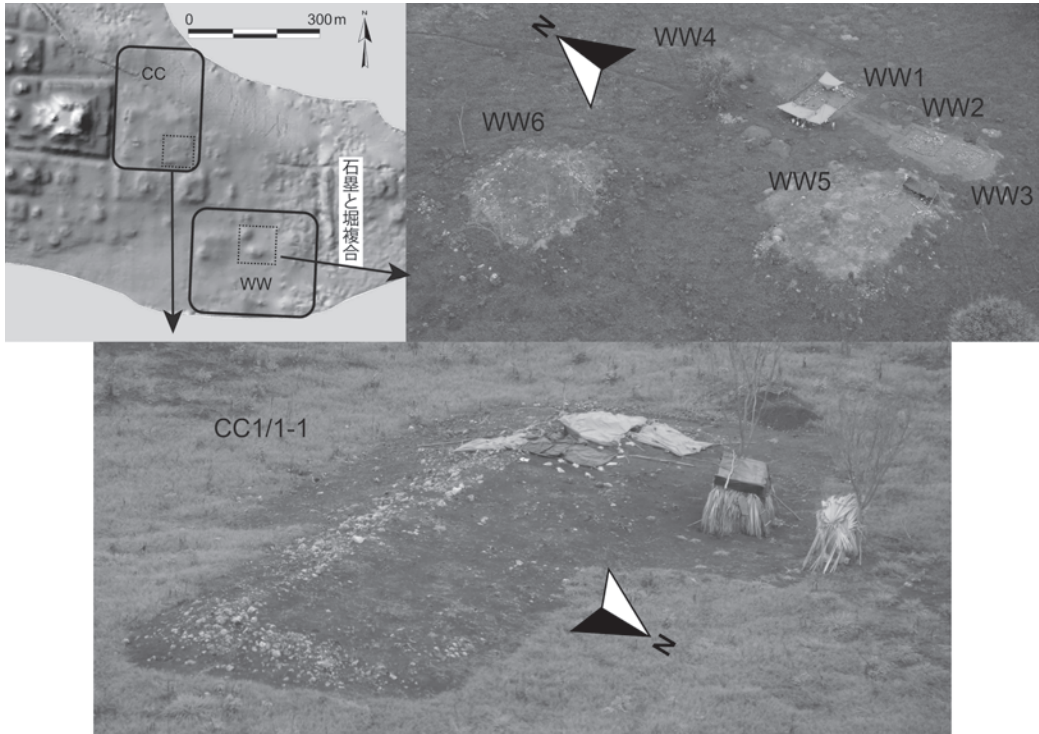


図6 セクターCC と WW の場所を示す図と CC1/1-1 と WW1~5 の場所を示す写真。[地図：ピュー、ジガドワ、写真：プルーデンス・ライス (Prudence Rice) ]

セクターCC と WW は石塁と堀の複合建造物より西側にあり、先古典期建造物群の中心部よりも東側にある(図6)。CC1/1 はグリッド状通路配置の東端にある基壇で、グリッド状区画の南東角に位置する。CC1/1 基壇上にいくつか建造物が確認されているが、現在までのところ東南角にある建造物 CC1/1-1 のみ発掘調査されている [Rice et al. 2007]。建造物の西側 12x9m の平面発掘調査の結果、CC1/1-1 は後古典期の祭祀建造物によくみられる公堂 (open hall) で、CC1/1 の南側に位置して北側を向いている。公堂は幅 35x 奥行 7m で、ペテン・イツァ湖周辺ではおそらく一番幅が広い公堂であると考えられる [Pugh and Shiratori 2018:241]。CC1/1-1 はコの字型をしており、内部には背面と西側面に沿って L 字型のベンチが確認された。表面漆喰は浸食されていて確認できなかった。ベンチの設置が一般的となっていた後古典期のものに比べると幅は狭く、1m の幅もなかった。正面北側に沿って、古典期後期から終末期の切り出された石を再利用したと思われる踏み段が連続して出土したことから、CC1/1-1 の公堂は高さ 10~15cm の踏み段を伴っていたことが明らかになった。公堂の内部に典型的にみられる儀礼用の人形香炉の破片はなく、遺物も比較的少なかった。後古典期の土器片以外には、古典期後



期の円筒印章や土偶、パチューカ産緑色黒曜石の破片が出土した。CCI/I-1 の裏手、南側斜面にもゴミ捨て場は見つかっておらず、出土遺物も乏しい。CCI/I-1 の北側に低い基壇が確認されているが、未調査のため住居址か祭祀用霊廟 (shrine) であるか調査が望まれる。

セクターWW は「石塁と堀複合」の西側で、カンデラリア半島南側湖岸に近いところにあり、遺跡中心部が建っている西側よりもやや低い地盤上にある。セクターWW 内にいくつかの建造物群が確認されているが、そのうち6つの建造物が後



写真1 コの字型建造物 WW1 (南側から撮影)。

古典期の祭祀建造物配置にある可能性から、建造物 WW1、WW2、WW3、WW5 の4つが発掘調査された (図6) [Rice et al. 2007]。WW1 は 11.5 x 8m で東西に長く、コの字型正面は南を向いている。おそらく 6.9 x 5.4m のコの字型の上部構造が WW1 基壇上に建っていたと考えられるが、まるで建物の外側にコの字型ベンチがあるような遺構が出土した (写真1)。入口から真正面の後壁にくぼみ (niche) が見つかり、儀礼用具が置かれていたと考える。内部床面には漆喰の痕跡は剥離していて確認できなかった。WW1 から 14.5m 南に位置し、4.6 x 4.5m のほぼ正方形の WW2 は北の WW1 よりも少し西を向いている。WW2 から 2m 南に WW3 が位置しており、3.5 x 3.5m のほぼ正方形は WW2 より少し小さいが、同じく少し西を向いている。興味深いことに、WW1、WW2、WW3 に共通して基壇の角が丸みを帯びている。草木や根によって攪乱されている可能性もあるが、3つの建造物に共通してみられることから、方形の建造物に丸みを帯びた基壇を持つ建築様式が、後古典期セクターWW の特徴と考えられる。WW5 の正確な大きさは不明だが、東西に長い長方形で、WW1、2、3 よりも 1m ほど高い基壇を持つ。WW2 と WW3 から西に約 2m 離れたところにある WW5 は、東側 (WW2 と WW3 側) のみ発掘調査された [Rice et al. 2007]。基壇の東壁は 60~80cm ほどの大きな石が組み込まれている。基壇上部の上層建築の東壁と南壁が出土し、室内南東隅に方形のベンチを確認した。WW5 は北側を正面にしたコの字型建造物であると思われるが、基壇上部北側において、西に 45 度傾いた二列の壁の跡が出土した (写真2)。この建造物遺構は、北向き建造物が放棄された後、上部に建てられたと考える。



写真2 コの字型建造物 WW5 (北側から撮影)。手前に西に 45°傾いた2列の壁の跡が見える。

セクターWW の建造物群は、後古典期後期の祭祀建造物群と考えられる。北側のコの字型建造物 WW1 は祈祷所 (oratorio)、祈祷所に面している正方形の WW2 と WW3 は霊廟 (shrine)、祈祷所の後ろのL字型建造物 WW4 と、霊廟の西側にあるコの字型建造物と思われる WW5 は公堂、そして公堂の北側にある WW6 は神殿 (temple) と考えられる。4つの建造物の発掘調査から後古典期前期から後期の土器や黒曜石製石鏃等が出土した。全ての建造物で後古典期の居住の下から先古典期の遺物と遺構が見つかったことから、後古典期

の人々がこれらの建造物を再利用したと推測できる。

### 2-2.3) セクターPP と QQ

セクターPP と QQ は遺跡中心部から南西の位置にあり、カンデラリア半島南湖岸に位置する（図7）。セクターPP 内には、遺跡中心部やセクターQQ が建っている地盤上のグループ（PP1 と PP2）と、湖岸に向かって傾斜し、湖岸から 100m ほど内陸部にある建造物群 PP3 がある。測量地図から建造物群 PP3 が、湖岸に建造された後古典期の船着き場の可能性を示唆していたため発掘調査を行ったが、調査の結果、後古典期の住居址と祭祀建造物址であることが分かった [Shiratori 2020]。傾斜地に3つの基壇が階段状に連なる PP3 の北側上段基壇の PP3/1 は、先古典期に建造された基壇上に後古典期初期の住居が少なくとも3つ確認されている。PP3/1 の北西にゴミ捨て場を発見し、多数の後古典期赤色スリップ土器や動物の骨、貝殻が見つかった。中段の基壇 PP3/2 は 21 x 10m で東西に広がり、基壇上には 17 x 7m の南を正面にしたコの字型建造物 PP3/2-1 がある。内部は少なくとも後壁に沿って幅約 1m のベンチを伴う。床面には部分的に表面漆喰が見つかった。基壇 PP3/2 南側正面から下段の基壇 PP3/3 へは2段の階段があり、階段下の西側に後古典期の埋葬が出土した。建造物 PP3/2-1 の裏手と基壇 PP3/2 の階段部分から多数の後古典期後期の祭祀用人形香炉の破片が出土していることから、PP3/2-1 が後古典期後期の祭祀建造物であったことが推測できる。上段 PP3/1 のゴミ捨て場出土の炭化物の年代は、後 1000～1400 年、中段 PP3/2 の裏出土の炭化物は、後 1000～1200 年という年代が得られている（表1）。

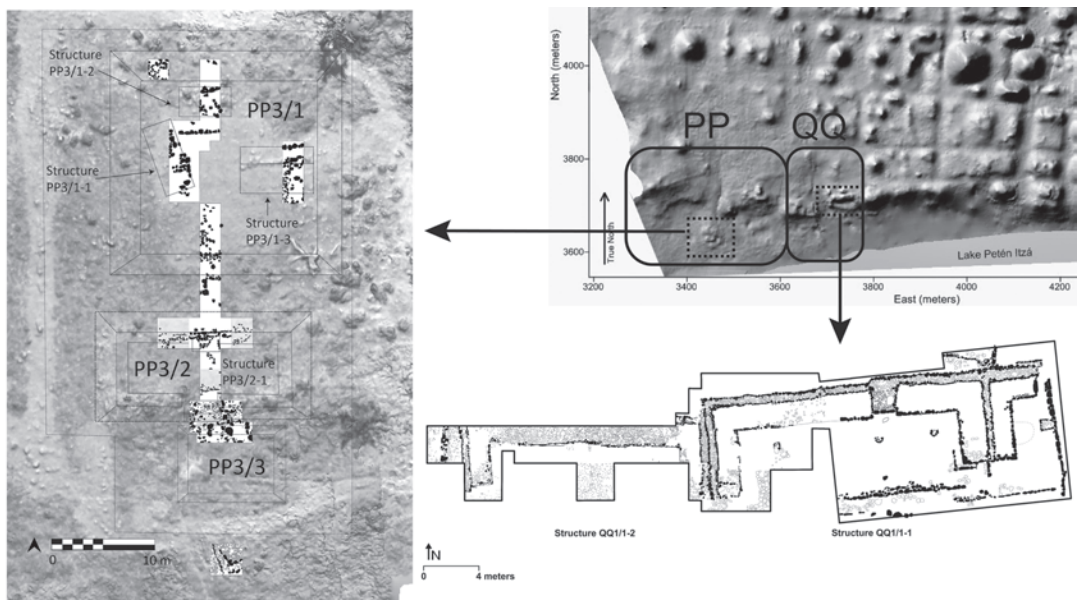


図7 遺跡南西部セクターPP と QQ (右上)。左の平面図はPP3/1 [白鳥作成]、右下の平面図はQQ1/1 [ピユー作成]。

セクターPP から東に 300m 離れたセクターQQ は、遺跡中心部と同じ高さの地盤に建造物群を有し、急斜面の縁に沿って建造物群QQ1 がある。QQ1/1 はコの字型基壇で急斜面の縁に沿って建ち、2つの上層建造物(QQ1/1-1、QQ1/1-2)を持つ。QQ1/1-1 と QQ1/1-2 は南を正面にして並んでいる。両方ともコの字型(列柱) 公堂で、後

古典期の祭祀建造物と考えられる [Pugh et al. 2016] (図 7)。東側の QQ1/I-1 は東端に横部屋 (transverse room) があり、壁に沿って L 字型のベンチがある。QQ1/I-1 の主室には L 字型のベンチが両側壁に沿ってあり、後壁の中央付近にある祭殿を挟んで向き合っている。祭壇付近は円石柱の跡が室内に残っており、QQ1/I-1 は列柱公堂であったことがわかる。QQ1/I-1 西壁の西側には QQ1/I-2 の東壁が接着しており、QQ1/I-2 は西側に横部屋を持つ。主室の壁に沿ってコの字型ベンチがある。QQ1/I-1 と同様にベンチ中央に祭壇があったと思われるが、浸食していて発見できなかった。また、QQ1/I-2 は石柱ではなく木造の列柱で屋根が支えられていたと考えられる。2 つの建造物は並んでいるが、東側の QQ1/I-1 が西に 1.5°~6.6°ほど傾いていて、建築の石の積み方も異なる [Pugh et al. 2016:5]。QQ1/I-1 は横部屋を含めて幅約 27m、主室だけで幅 23m あり、奥行きが 7.4m ある。QQ1/I-2 の横部屋の幅は不明だが、主室の幅は 19.8m、奥行きは 5.8m あり、QQ1/I-1 より小さい。両公堂の祭壇付近から亀の石彫がそれぞれ出土しており、祭壇に置いて祭祀儀礼が行われていたと推測できる [Pugh et al. 2016:8-10]。他にもセクター QQ 以外では見られない鳥と爬虫類の石彫が QQ1/I-1 から出土していることから、QQ1/I は後古典期ニシュトゥン・チッチ遺跡において祭祀儀礼の中心であったと考えられる。石彫以外では、QQ1/I-1 から後古典期後期の祭祀用人形香炉の破片が出土し、イツァムナ (Itzamna) 神 (または God D) を表していると考えられる [Pugh et al. 2016]。他にもサンゴの破片、QQ1/I 周辺からはパチューカ産緑色黒曜石 11 点など、長距離交易を通してもたらされた多様な遺物が出土していることから QQ1/I の重要性がうかがえる。QQ1/I の北側 (裏手) 出土の炭化物は後 1000~1200 年の年代が得られているが (表 1)、QQ1/I の遺物からそれよりも下った 15 世紀まで QQ1/I が使用されていたと考える。全体的に見て、セクター QQ は土錘の出土量が多く (セクター PP: n=34; セクター QQ: n=134)、カンデラリア半島南湖岸の地域で一般的に漁撈が行われていたことが確認でき、祭祀建造物を所有する QQ1/I が漁業を管理していた可能性もある。

表 1 放射性炭素年代測定結果

ID 番号	コンテキスト	サンプル	$\sigma^{13}\text{C}$	炭素年代 (BP)	較正年代 (AD) <sup>a</sup>
AA-102696	QQ1/I, ゴミ捨て場	動物骨	-24.5	848 ± 39	1049-1273
AA-114736	PP3/2-1	木炭	-26.4	940 ± 40	1025-1207
AA-114737	PP3/1-2, ゴミ捨て場	木炭	-26.2	750 ± 40	1218-1377
AA-114738	PP3/1-2	木炭	-25.9	931 ± 42	1029-1211
AA-114739	PP3/1-2	木炭	-26.9	994 ± 40	991-1159
AA-114740	PP3/1-2, ゴミ捨て場	木炭	-26.4	825 ± 40	1158-1278
AA-114741	PP3/1-2, ゴミ捨て場	木炭	-25.9	634 ± 39	1285-1400
AA-114742	PP3/2-1	木炭	-25.8	965 ± 40	995-1169

<sup>a</sup> OxCal. 4.4.1/IntCal20 により較正

### 3. 17 世紀イツァ族とチャカン・イツァ

#### 3-1. 17 世紀イツァ族について

これまでニシュトゥン・チッチ遺跡において発掘調査された後古典期の遺構と遺物について述べてきたが、16~18 世紀に書かれた史料と、歴史家 Grant・ジョーンズ (Grant Jones) の研究から述べられているニシュトゥン・チッチ遺跡があるカンデラリア半島について述べることにする。まず史料からわかる 17 世紀イツァ族に



ついてまとめてみる。ペテン・イツァ湖周辺に居住していたイツァ族はいくつかの血縁集団によって構成されており、全体としてのイツァ族が治める領地は4つの地方 (provincia) に分かれていて、それぞれの地方は2人の首長 (b'atab') によって統治されていた [Avendaño y Loyola 1997:45-46]。首都はタイツァ (Tayza) またはノフペテン (Nojpeten) と呼ばれ、ペテン・イツァ湖に浮かぶ島 (現・フローレス島) にあり、首都は第5 (中央) 地域とみなされ、イツァ族の王アハウ・カン・エク (Ajaw Kan Ek') と首長アフ・キン・カン・エク (AjK'in Kan Ek') によって統治されていた。4つの地方はペテン・イツァ湖外側にほぼ東西南北に分かれ、東はコウォ (Kowoj)、西はチャカン・イツァ、南はイツァ、北はチャタ (Chata) と呼ばれる集団が居住していたと考えられている [Rice 2018] (図1)。これらの集団を中心的に統治するイツァ族の王アハウ・カン・エクは絶対的な権限は持っておらず、首長たちによる合議によって案件が決定されていた [例えば Villagutierre Soto-Mayor 1933:75 参照]。スペイン人の記録によれば、イツァとコウォは長らく敵対関係にあったという [Avendaño y Loyola 1997:55]。さらに、チャカン・イツァの首長キン・カンテ (K'in Kante') は、アハウ・カン・エクの叔父であるにも関わらず、アハウ・カン・エクに敵対しており、コウォの首長アフ・コウォ (AjKowoj) と手を組んでいた [Avendaño y Loyola 1997:55-56]。このようにイツァ族は同じような氏族が集まった連合組織のような集団であったと考えられる。

### 3-2. 16～17世紀のチャカン・イツァについて

ニシュトゥン・チッチ遺跡があるチャカン・イツァについては、1525年から1700年にかけてこの地域を訪れたスペイン人が書いた史料に記述が見られ、そこから後古典期におけるこの地域の置かれた歴史的状況が推測できる。1697年マルティン・デ・ウルスア・イ・アリスメンディ (Martín de Ursúa y Arizmendi) によってイツァ族の首都タイツァが征服されるまで、ニシュトゥン・チッチ遺跡またはチャカン・イツァ地域を通過したスペイン人は、1525年のエルナン・コルテス (Hernán Cortés)、1580年のペドロ・ロレンソ修道士 (Fray Pedro Lorenzo)、そして1696年のアンドレス・デ・アベンダーニョ・イ・ロヨラ修道士 (Fray Andrés de Avendaño y Loyola) である。ロレンソ一行の記述にはチャカン・イツァについて該当する部分がほとんどないため、ここでは取り上げない。コルテスとその一行はイツァ領を訪れて、イツァ族の王アハウ・カン・エクに面会した最初のスペイン人である。1525年、メキシコ中央高原のテノチティトランを制圧したコルテスは、陸路でホンジュラスへ向かう途中チャカン・イツァ地域を通過してアハウ・カン・エクに会った [Díaz del Castillo 1904:299-301; Lopez de Cogolludo 1971:vol1.58-59; Villagutierre Soto-Mayor 1933:41-44]。北部から下ってきたコルテス一行はペテン・イツァ湖越しに首都の島が見える、湖の入り江に出る。その場所はカンデラリア半島の北側にある現在エンセナーダ・デ・サン・ヘロニモ (Ensenada de San Jerónimo) と呼ばれる入り江であると思われる。そこでコルテスは一人の先住民を捕らえて、タイツァまでの行き方とカヌーを所望する。チャカン・イツァの住民と思われるその人は、入り江の先に畑 (labranza) と集落 (pueblo) があり、そこでカヌーが手に入るはずだと言って案内する。入り江は沼地で歩きにくく、コルテスも腰まで沼に浸かって歩いて行った。行きついた畑と集落には住民の半数がいて、多くは逃げ出していた。空き家に入ったコルテス一行は破れた魚網 (redes rotas) と古い木綿布 (mantas viejas) を見つけて、湖で魚をとる。サバロ (sábalo) に似た味の無いトゲが多い大きな魚がたくさん湖にいた。湖のほとりで野営していると、アハウ・カン・エクがカヌーでやって来てコルテスと対面する。この時のアハウ・カン・エクは17世紀のアハウ・カン・エクと同一人物ではない。

コルテスのチャカン・イツァ通過から171年後、1695年12月にアベンダーニョ修道士はメリダを出発し、1696年2月にチャカン・イツァに到着した後、数日間タイツァに滞在した。アベンダーニョはイツァ族について詳しく報告書に記し、地図も残している (図8) [Avendaño y Loyola 1997]。それによれば、ペテン・イツァ

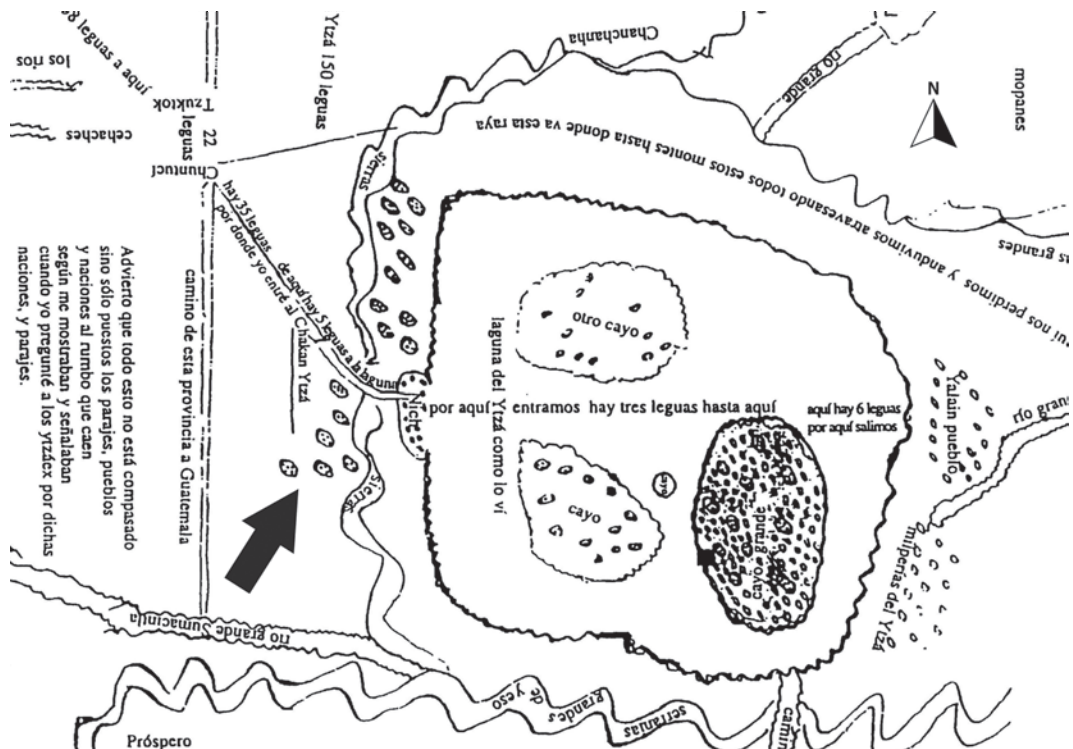


図8 アベンダーニョ修道士によるペテン・イツァ湖周辺の拡大詳細図。矢印の指すあたりがチャカン・イツァ領であり、チャカン・イツァ (Chakan Ytzá) とニッチ (Nicht) が湖の西側に記されている [Avendaño y Loyola 1997:51 より改変]。(矢印と方位記号は原本にはない。)

湖西側地域はチャカン・イツァの領地であり、2人の首長キン・カンテ (K'in Kante') とアフ・トゥ (AjTut) によって統治されていた [Avendaño y Loyola 1997:31-33]。チャカン・イツァ地方はいくつかの小さい集落 (pueblillos pequeños) があり、その中心の村 (pueblo) はニッチ (Nicht) と呼ばれ、首長はアフ・トゥであった [Avendaño y Loyola 1997:33]。

ニッチは湖岸の岬にあり、10軒ほどの家があったという。アベンダーニョはカデマカルまたはサクレマカル川 (Río Cademacal/Caclemacal; サクプイ湖か?) を渡ってチャカン・イツァ領に入り、入ってすぐの集落で首長キン・カンテの親族に会う。その後歩いて湖岸のニッチにたどり着くが、ニッチまでおよそ5レグア (約21km) の距離で、深い木々に覆われた山や沼地があり、川が3つあったと記している。地図にはチャカン・イツァ (Chakan Ytzá) とニッチ (Nicht) が記されており、集落と思われる線で囲んだ点 (家屋か?) がチャカン・イツァ領内に描かれ、ニッチは湾になっている (図8)。ニッチまで女や子供を含めたチャカン・イツァ住民全員がアベンダーニョに同行したとあるが、その数は約600人だったとある [Avendaño y Loyola 1997:32-33]。ニッチで2時間迎えのカヌーを待ち、その後カヌーで首都タイツァに行き、イツァ族の王アハウ・カン・エクに会った。

アベンダーニョが去ってからちょうど1年後の1697年2月にウルスア一行がチャカン・イツァに到着し、湖岸にある岬村のチッチ (Ch'ich') に滞在して帆船を造り、3月13日にタイツァ征服に向けて出港した [Archivo General de Indias, Sevilla (以下AGIと略す), Guatemala 151BIS, no. 2]。このチッチはニッチと同一で現在のブタ・ニフトウンあると考えられているが [Jones 1998:488n6]、1年前チャカン・イツァの中心だった村は、ウ



ルスア一行が到着した時は既にもぬけの殻だったとある [AGI, Guatemala 151, no. 3]。おそらくウルスア一行の接近を前に、住民は逃げ出したと考えられる。新たに築いた岬町チッチに、多いときで 300~500 人が待機し、ウルスア一行は、兵士と先住民の部隊を含めると約 2000 人だったとある [AGI, Guatemala 151BIS, no. 2; Jones 1998:229]。史料によればチッチには防御壁が造られたか、またはそれまであったものを補強したとある [AGI, Guatemala 151BIS, no. 2; Jones 1998:489n13]。征服後 1697 年 5 月に引き上げるまで 4 カ月間、チッチはスペイン人にとって重要な拠点として使用された。

首都タイツァ陥落後、1702~1703年にかけてペテン・イツァ湖周辺に多くの教会 (misiones) が建てられた。そのうちの1つの教会は「島から1レグア西側の湖に突き出た岬」に1702年に建てられとされるが、そこはおそらくカンデラリア半島のプンタ・ニフトゥンである [Rice 2009a]。16家族 (36軒) が移り住んだというが [Jones 1998:394Table15-1]、このうち多くはTzinという名字を持っていた [AGI, Escribanía 339B, no. 15]。征服前はイツァ領の東側地域を治めるイツァの首長の一人にバタブ・ツィン (B'ata'b Tzin) (またはアフ・ツィン (AjTzin)) という名の首長がいたことから、同一の氏族と考えられる [Avendaño y Loyola 1997:45]。歴史家ジョーンズは、このTzin家族は征服後イツァ湖東側から (強制的に) 移住してきたのではないかと考える [Jones 1998:392]。移住してきて間もなく、イツァ族の攻撃から逃れるため、プンタ・ニフトゥンよりも北西の地点にサン・ヘロニモ教会を建てて移り住む [AGI, Escribanía 339B, no. 15; Jones 1998:392]。その後プンタ・ニフトゥンの教会は放棄されたと考えられる。1736年に描かれたペテン・イツァ湖周辺図には、サン・ヘロニモ教会はチャカン・イツァ領があったペテン・イツァ湖西側に描かれているが、カンデラリア半島が描かれていないため、プンタ・ニフトゥンかそれよりも北部なのか不明である (図9)。1703年にはもう1つの教会、ヌストラ・セニョーラ・デ・ラ・

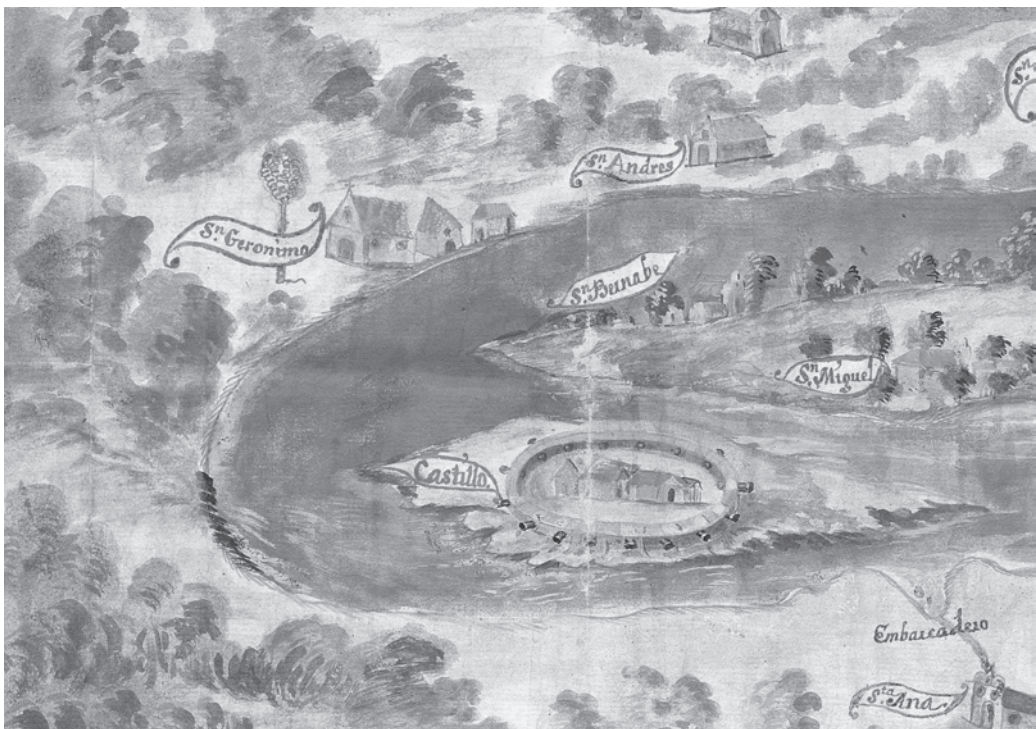


図9 1736年発行のペテン・イツァ湖周辺図。 [ESPAÑA. MINISTERIO DE CULTURA Y DEPORTE, Archivo General de Indias, ES.41091.AGI/MP-GUATEMALA,26//より改変]

カンデラリア (Nuestra Señora de la Candelaria) と呼ばれる教会が、サン・ヘロニモ教会から湖岸に沿って1レグア (4.2km) の所に建てられたとあるが [AGI, Escibanía 339A]、すでに放棄されていたのか、1736年の図には載っていない。

## 4. 考察

### 4-1. 居住形態

これまでニシュトウン・チッチ遺跡の発掘調査から得られたデータと、16～18世紀のチャカン・イツァについてスペイン人によって書かれた文献史料に、歴史家グラント・ジョーンズによる解釈を加えた記述について述べてきたが、発掘調査から得られたデータに先の文献史料とユカタン北部の史料を加えて検証してみたい。まず、同遺跡の後古典期における居住形態について検証する。発掘調査から、同遺跡における後古典期の建造物形式の特徴として、コの字型またはL字型建造物があり、それらの壁に沿って内側または外側にベンチを伴う。また、イツァ領では珍しい「タンデム式」建築様式が確認されている。コの字型またはL字型建造物は、ペテン地域において古典期後期 (後600～800年) 頃から見られ始め、後古典期において住居址と祭祀建造物の両方の建造物に頻繁に見られる [Rice 1985:313; Shiratori 2019:170]。コの字型もL字型も低い基壇上に建てられており、背面や側面の壁に沿って、建造物の内部 (または外部) にベンチが造られている (図10)。ベンチは座るためだけではなく、寝台や祭壇としても使用されたことが分かっており、後古典期エリート階級の住居や祭祀建造物に確認されている [Pugh and Shiratori 2018:231-232; Tozzer 1941:86]。一般的に後古典期の公堂または列柱公堂はポボル・ナフ (popol naj) または集会場のような重要な役割を担っていたと考えられており、集会の他、公的な儀式を行う場としても使用されていたとされる [Carmack 1981:159-174; Proskouriakoff 1962:89-91]。ニシュトウン・チッチ遺跡において確認されたベンチを伴う建造物 CCI/1-1、PP3/2-1、WW5、QQ1/1-1、QQ1/1-2、XX1/1-1 は、それぞれの地区において中心的な公共建造物であり、集会や祭祀儀礼が行われていたと考えられる。ペテン地域でも特に長い、35mの公堂を持つ CCI/1-1 は、かなり開けた公堂で、他よりも公共性が高かったと推測できる。

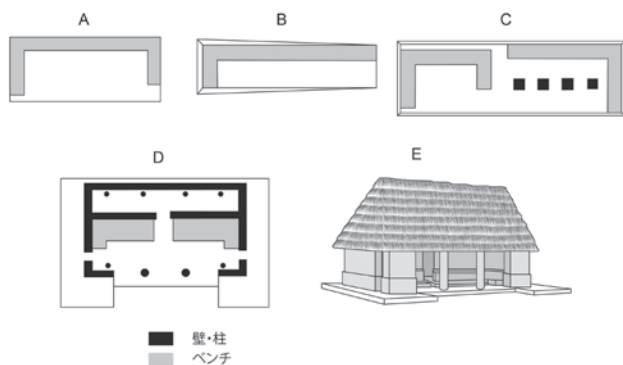


図10 後古典期建造物形式の例。A-C: ペテン地域で見られるコの字型・L字型建造物 [Rice 1985:Figure 9.2 より改変]、D-E: マヤパンの一般的なタンデム式住居の平面図と復元図 [Smith 1962:Figure 9b, 9c より改変]

次に、ZZ1/1-1で確認されたタンデム式建築様式であるが、ユカタン北部のマヤパン遺跡やペテン・イツァ湖東側のサクペテン遺跡では一般的な建築様式である [Proskouriakoff 1962; Pugh 2009]。前室と後室があり、間に仕切り壁のある様式で、ユカタン半島北部において古典期終末期頃 (後800～900年) から見られ、主にエリート層の住居址で確認されている [Freidel and Sabloff 1984; Masson et al. 2014; Pugh 2009]。タンデム式住居の前室は漆喰の床とベンチを伴うが、後室には多くの場合ベンチも漆喰の床も見られない。ペテン・イツァ湖東側のクウォ領域に見られるタンデ

ム式住居は、湖西・湖南のイツァ領やチャカン・イツァ領内ではほとんど見つかっていない [Pugh and Shiratori 2018:238]。ニシュトゥン・チツチ遺跡のZZ1/1-1に見られるタンデム式建造物は前室にベンチを伴っており、マヤパンやサクペテン遺跡のタンデム式建造物と類似する。

タンデム式建築構造については、アベンダーニョの史料に記述されている。彼はチャカン・イツァの居住形態については述べていないが、首都タイツァで訪れたアハウ・カン・エク王の住居が、前室と後室を持つタンデム式住居構造であったと記している。前室と後室があり、前室で客人をもてなし、入り口の大きなテーブルで儀礼が行われたとある [Avendaño y Loyola 1997:36]。165cmの長さの石のテーブルは石脚で支えられており、神官たちのために石で作られた12脚の丸い椅子がテーブルのまわりにあったという。アベンダーニョは前室にあるそのテーブルで会議や集会が行われると説明しているが、同時にそのテーブルが生費用 (la mesa del sacrificio) であるとも述べている [Avendaño y Loyola 1997:36]。同様に、ユカタン北部の例であるが、ランダ修道士も「ユカタン事物記」の中でタンデム式住居建築について記述している。ランダによれば、横に長い住居内部に前室と後室を分ける仕切り壁があり、前室は社交の場で客人が寝る場所であり、後室は住人が寝る場所であると述べている [Tozzer 1941:85-87]。この2つの記述から、ZZ1/1-1を含む後古典期のタンデム式建造物は住居兼祭祀建造物/公堂であると考えられる。

文献によれば、ユカタン地域における植民地期の住居は常に東向きであったという [Real Academia de la Historia 1900:213; Tozzer 1941:86n357]。後古典期マヤパンの住居址も東向きが多く、西向きは少ない [Masson et al. 2014:228; Smith 1962:208]。ペテン地域ではサクペテン遺跡の後古典期の5つの住居址中、西向きはなく東向き1、南東向き1、北東向き1、南向き2であった [Pugh 2009:189]。ニシュトゥン・チツチ遺跡において、住居址と確認できる後古典期の建造物はPP3/1-1、PP3/1-2、PP3/1-3、XX1/1-2、ZZ1/1-1の5つである。このうちPP3/1-1とZZ1/1-1は東向きで、PP3/1-2は南向き、PP3/1-3は不明、そしてXX1/1-2は西向きである。マヤパンやサクペテン遺跡において西向きの建造物は主に祭祀建造物であるが、XX1/1-2は炉と思われる遺構が見つかることから、住居兼祭祀建造物の可能性を示唆できる。建造物形式だけではなく、調査セクター中の建造物群について検証する。文献史料の中でもチャカン・イツァについて一番詳細な記述を残しているアベンダーニョによれば、17世紀末期のチャカン・イツァはアベンダーニョの推測で約600人の住民がおり、いくつもの小さな集落 (pueblecillos pequeños) と多くの村落 (rancherías) から構成されていて、その中心の村でさえ10軒ほどしかない。そうであるならば、それより小さい集落において家屋はもっと少ないと筆者らは考える。1702年にサン・ヘロニモ教会に伴って入植した集団は16家族で36軒あることから、1家族約2~3軒の家屋を持っていたということになる。つまり、1696年のニッチには4~5家族が住んでいて、ニッチ以外の集落はニッチと同等の家屋数がそれより少ない数であり、家族数 (2~3) と家屋数 (4~7) であったことになる。1家族が約2~3軒の家屋を持っていたとすると、拡大家族が集まっていくつかの家屋で暮らしていたと考える。アベンダーニョはこの数軒の拡大家族が集まった地域を「集落」と認識し、それよりも少ない1家族2~3軒が暮らしていた地域を「村落」と認識したと推測できる。

発掘調査からセクターPPの建造物群PP3では階段状になった3つの基壇上に少なくとも4つの建造物が確認された。下段の建造物は不明だが、上段に3軒の住居と中段に祭祀建造物を持ち、1つの建造物群として分離しているPP3は、アベンダーニョの言う所の「村落」と考える。PP3から300m東にある建造物群QQ1は、2つのコの字型 (列柱) 公堂と、住居址と思われる建造物が公堂の北側 (裏手) に3つある、後古典期後期の祭祀建造物群である。並列した公堂建造物はペテン地域では他に例がなく、公堂の規模や技術、そして精巧な祭祀用人形香炉の出土から、建造物群QQ1は後古典期後期において祭祀の中心であり、PP3より大きな「集落」であつ

たことが伺える。QQ1/1 からは接触期以降のヨーロッパ製品が出土していないことや、炭素年代測定から QQ1/1 はアベンダーニョが訪れた 17 世紀以前の後古典期にチャカン・イツァの中心の集落であったと推測できる。その他の建造物群 WW1~6 や建造物群 XX1/1 の地域は「集落」とであると推測できるが、建造物 CC1/1-1 周辺の建造物群が確認されていないため、さらなる調査が望まれる。

#### 4-2. 生活様式

発掘調査により出土した遺物を文献史料と比較することにより、チャカン・イツァの人々の生活様式を検証してみる。コルテスが実見した 16 世紀半ばのチャカン・イツァの住民に関する記述からは、チャカン・イツァには畑や集落があり、破れた網と古い木綿布を使って魚を捕っていたことがわかる。網や木綿布は有機物のため残っていないが、網に取り付けられた土鍾が出土している。ニッチ集落があった ZZ1/1-1 からは石鍾 1 点、土鍾 74 点が、村落サイズの PP3 全体では土鍾 34 点が出土していることから、集落の大きさと土鍾の点数が比例する。特に祭祀建造物群 QQ1/1 出土の土鍾が多く (n=101)、土鍾が祭祀に使用されていた可能性や公共のものとして管理されていた可能性も示唆できる。建造物 PP3/1 のゴミ捨て場からは多数の魚の骨が出土しており、コルテスの言う「サバロに似た味の無いトゲが多い魚」 [Díaz del Castillo 1904:299] は、ペテン・イツァ湖で有名なペスカード・ブランコ (pescado blanco) であると思われるが、詳しい分析調査によりどのような魚が捕られていたのか今後明らかになる。

先にも述べたように、コルテス一行は現在のエンセナーダ・サン・ヘロニモから沼地を歩いてカンデラリア半島にたどり着き、畑と集落を見つけたと考えられる。この畑はトウモロコシ畑 (maizal) であり、カンデラリア半島に広がっていて、トウモロコシ畑や湖岸に PP3 のような村落が点在していた。コルテス一行がチャカン・イツァの集落にたどり着いたとき、無人の集落を見つける。住人たちはコルテスたちが来ることを知っていて事前に逃げ出していたり、襲撃しようと隠れていた [Díaz del Castillo 1904:299-300]。また、コルテスがチャカン・イツァ領に入る直前の集落では、たった今まで誰かがいたような、もぬけの殻の家屋を見ていることから、先住民たちは危険を察知すると全てを置いてすぐ安全な森の中に身を隠すという習慣があると推測できる [Villagutierre Soto-Mayor 1931:39]。多くの文献に書かれているように、イツァ族は「戦争に長けていて、近隣の集団から恐れられていた」 [Díaz del Castillo 1904:299] とあり、チャカン・イツァの人々も、集落が小さいため急襲の際は少ない人数ですぐに逃散できたと推測する。さらに、アベンダーニョの記述において、ニッチで年長者を見て驚いたとある [Avendaño y Loyola 1997:32]。神官を除いて、50 歳以上になると、魔術師にならないように住民の頭を切り落とすといひ、ニッチに至るまでアベンダーニョは年配の人を見たことがなかったと言う。この話は、チャカン・イツァに関わらず先住民の集団が年長者を含まない家族構成であったと考えられる。17 世紀の先住民が植民地支配や戦を逃れて移住を繰り返していたため、長距離移動する際、年長者が含まれなかった結果なのかもしれない [大越 私信]。アベンダーニョがニッチで出会った年長者は、ニッチの集団が移住後長期間そこに居住していた可能性を示唆できる。ZZ1/1-1 において埋葬は見つからなかったが、今後は後古典期から植民地期の埋葬から高齢者の割合を調べてみたい。

武器の点からみると、コルテスは弩で武装させた 12 人の先住民 (ballesteros) を連れて沼地を歩いている。また、チャカン・イツァに入る前の集落では様々な武器類がまとめて置いてある建物を発見しており [Villagutierre Soto-Mayor 1931:39]、石刃、弓、石鏃、木剣 (macanas) などが置かれていたという。ニシュトゥン・チッチ遺跡の後古典期の遺構からはまだ武器庫は見つかっていないが、今後の発掘で武器類が多く出土する建造物を見つけることができれば、武器庫を同定できるだろう。アベンダーニョが出会ったチャカン・イツァ



の住民も弓と矢を持っており [Avenidaño y Loyola 1997: 32-33]、戦いのたびに弓矢を使ったとすると、かなりの数の石鏃が地表に落ちている可能性がある。現時点で石鏃の出土数がわかるものは、セクターPPのPP3で2点（黒曜石）、セクターZZのZZ1/1で133点（黒曜石97点）である。ZZ1/1はチャカン・イツァの中心ニッチがあり、イツァの首都タイツァへの重要な船着き場があったことから、戦闘も多かったと推測する。また、征服後に建てられたサン・ヘロニモ教会に移住してきた人々は、イツァからの攻撃を逃れて北へ移動していることから、ZZ1/1の石鏃はイツァによる攻撃の可能性もある。湖岸の村落PP3で戦が少なかったことは想像に難くない。

後古典期後期マヤ地域で一般的な祭祀用人形香炉の土器片は、全ての調査地域から出土しているが、特に注目すべきはQQ1/1-1出土のイツァムナ神の破片である。「マヤパン様式 (Mayapán-style)」と呼ばれる後古典期後期の人形香炉は、ペテン地域では主にペテン・イツァ湖東側のコウォ領から出土しており、多くは復元されている [Rice 2009b]。イツァまたはチャカン・イツァ領では復元可能なマヤパン様式の人形香炉はほとんど見つかっておらず、このQQ1/1-1出土の人形香炉は大変珍しい。スペイン人はこれらを偶像 (idolo) と呼び、アベンダーニョは首都タイツァにおいて偶像が家の中ではなく、人目に付く屋外や道に置かれていたと記述している [Avenidaño y Loyola 1997:36]。首都タイツァの人形香炉はスペイン人によって破壊されたため残っていないと考えられるが、イツァ領タヤサル遺跡やニシュトウン・チッチ遺跡でもこのイツァムナ神以外に復元可能なサイズの人形香炉が見つからないのは、スペイン人侵攻時にどこかにまとめて隠していたのかもしれない。

#### 4-3. まとめ

ニシュトウン・チッチ遺跡の発掘調査で得られた後古典期の遺構と遺物から、居住形態と生活様式について文献史料と照らし合わせて検証した結果、以下の点が確認された。まず後古典期のチャカン・イツァの居住形態については、文献に書かれていたような「集落」と「村落」の違いを特定し、整合性を検証した。集落・村落それぞれにベンチを伴う祭祀建造物または住居兼祭祀建造物を有しており、各集落・村落規模での祭祀儀礼が盛んであったと推測する。集落は2~4家族、家屋が4~7軒で構成されており、村落は大家族が1~3軒に住み、湖岸などの周辺地域に居を構えていた。建造物形式については後古典期マヤ地域で一般的な、コの字型・L字型建造物を有し、ペテン・イツァ湖東側のコウォ領の建造物とも一致するが、コウォ領で一般的なタンデム式住居がチャカン・イツァではZZ1/1-1のみである。チャカン・イツァの住居址データをさらに収集し、タンデム式住居のペテン・イツァ湖周辺地域における分布と血縁集団について調査する必要がある。

住居建築におけるコウォとの差異は、イツァ/チャカン・イツァ領とコウォ領の間の差異の1つとして以前から指摘されている祭祀建造物配置との関連性が指摘できる。コウォ領で一般的な祭祀建造物配置の temple assemblage は、イツァ領、チャカン・イツァ領では確認されていない [Pugh and Shiratori 2018]。この配置はユカタン北部のマヤパン遺跡で多数確認されていることから、コウォの人々とマヤパンとの繋がりが指摘されているが、今回明らかになったタンデム式住居配置もまた同様である。ペテン・イツァ湖をはさんで西側チャカン・イツァと東側コウォの異なる建築様式が明らかになり、ペテン・イツァ湖周辺地域のダイナミズムを考える上で重要なデータが得られた。

生活様式については、湖に近く魚釣り用の土錘が多数出土しており、住居址だけではなく祭祀建造物からも多量に出土していることから、土錘が祭祀儀礼に使われていた可能性や公的に管理されていた可能性が明らかになった。戦闘に使われる石鏃は漁村のPP3ではほとんど見つかっていないことから、より大きな集落を中心に戦闘が行われていたと言える。今回チャカン・イツァの祭祀儀礼に関わる遺物や文献史料が少なく論じるこ



とができなかったが、今後調査を進めて後古典期チャカン・イツァの文化の復元を試みる。

## 5. おわりに

本研究では、これまで発掘されたニシュトゥン・チツチ遺跡のなかでも後古典期の遺構に焦点をあて、16～18世紀のスペイン人による文献史料を用いて居住パターンと生活様式を探り、解釈を試みた。これまで得られたデータから、集落規模、生業、集落・村落における祭祀儀礼、武器に関する点において、後古典期チャカン・イツァの暮らしの一端を明らかにした。この結果から、湖東側コウォ領とは異なる居住パターンが明らかになり、ペテン・イツァ湖周辺地域におけるチャカン・イツァの他集団との関係性を探る上で重要なデータが得られた。本研究は、チャカン・イツァの社会像復元に迫るだけでなく、ペテン・イツァ湖周辺地域における後古典期社会の復元に向けた一研究として位置づけられる。

これまでニシュトゥン・チツチ遺跡において後古典期は土器の種類や形式から前期と後期に区分していたが、今回一部であるが炭素年代が測定され、より正確に年代を把握できるようになった。暦年較正年代では11～15世紀の年代が得られたが、文献史料年代との差は最大で700年ある。この差を埋めるにはもっと多くの炭素年代測定が必要であることを確信した。後古典期の炭素年代測定で難しいことは、炭素サンプルが地表に近い土壌にあるため、往々にして1950年より後の年代が得られることだ。さらに、湖に近いことから淡水リザーバー効果により、亀や魚などの骨を炭素年代測定することができない。これらのことを踏まえて多くの木炭サンプルを年代測定にかけなければならない。今後はニシュトゥン・チツチ遺跡において、後古典期の埋葬に関するデータを増やし、居住民の年代や性別、人数を調べ、同位体分析やDNAから出自を探るなど、さらに詳細にチャカン・イツァの人々について明らかにしたい。

### 【謝辞】

本稿に対して的確なコメントや修正点をご指摘くださった2名の査読者の方々に深く感謝申し上げます。本研究における発掘調査は、JSPS 特別研究員奨励費（研究課題番号：19J02048）、アメリカ国立科学財団（助成番号：BCS-1037927, BCS-9222373, BCS-1219646, BCS-2020668）の助成を受けたものである。筆者らは、これまでのプロジェクト・マヤ・コロニアル、ペテンイツァ考古学プロジェクト（Proyecto Arqueológico Itza del Petén）、イツァ考古学プロジェクト（Proyecto Arqueológico Itza (PAI)）のプロジェクトメンバー、特にPAIのエベリン・マヌエラ・チャン・ニエト修士（MSc. Evelyn Manuela Chan Nieto）、発掘調査に参加してくれたサン・カルロス大学ペテン校（Centro Universitario del Petén, USAC）の学生、サン・アンドレス／サン・ホセの作業員、グアテマラ国立人類学歴史研究所（IDAEH）、ベルガーラ（Vergara）家・バルディゾン（Baldizón）家の方々に感謝の意を表す。また、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所所長大越翼教授には貴重なご意見を頂いた。心より感謝する。

### 註

（註1）ペテン・イツァ湖周辺遺跡における編年は、後古典期の終焉を最初のスペイン人（エルナン・コルテス）と接触した1525年までとし、1525年からイツァ族の首都がスペイン人に陥落する1697年までを接触期（Contact Period）と呼び、1697年から1821年までを植民地期として扱っている[Rice and Rice 2018: Table 1-2 参照]。

## 参照文献

Avendaño y Loyola, Fray Andrés de

1997 *Fray Andrés de Avendaño y Loyola: Relación de las Dos Entradas que Hice a la Conversión de los Gentiles Vtz'áex, y Cehaches*. Anton Sauerwein, Möckmül.

Carmack, Robert M.

1981 *The Quiché Mayas of Uatatlán: The Evolution of a Highland Guatemala Kingdom*. University of Oklahoma Press, Norman.

Chase, Arlen F.

1983 *A Contextual Consideration of the Tayasal-Paxcaman Zone, El Peten, Guatemala*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Coe, Michael D.

1965 A Model of Ancient Community Structure in the Maya Lowlands. *Journal of Anthropological Research* 21(2):97-114.

Cowgill, George L.

1963 *Postclassic Period Culture in the Vicinity of Flores, Peten, Guatemala*. Unpublished Ph.D. dissertation, Harvard University, Cambridge.

Díaz del Castillo, Bernal

1904[1568] *Historia Verdadera de la Conquista de la Nueva España*. Tomo II, Oficina tipográfica de la secretaría de fomento, México.

Estrada-Belli, Francisco

2011 *The First Maya Civilization: Ritual and Power before the Classic Period*. Routledge, New York.

Freidel, David A., and Jeremy A. Sabloff

1984 *Cozumel: Late Maya Settlement Patterns*. Academic Press, Orlando.

Hansen, Richard D.

2016 Cultural and Environmental Components of the First Maya States: A Perspective from the Central and Southern Maya Lowlands. In *The Origins of Maya States*, edited by L.P. Traxler and R.J. Sharer, pp. 329-416. University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, Philadelphia.

Jones, Grant D.

1998 *The Conquest of the Last Maya Kingdom*. Stanford University Press, Redwood city.

López de Cogolludo, Diego

1971[1688] *Los Tres Siglos de la Dominación Española en Yucatan, o sea Historia de Esta Provincia*. 2 vols, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.

Masson, Marilyn A., Timothy S. Hare, and Carlos Peraza Lope

2014 The Social Mosaic. In *Kukulcan's Realm: Urban Life at Ancient Mayapán*, edited by M.A. Masson and C. Peraza Lope, pp. 193-268. University Press of Colorado, Boulder.

Meissner, Nathan J.

2014 *Technological Systems of Small Point Weaponry of the Postclassic Lowland maya (A.D. 1400-1697)*. Unpublished

Ph.D. dissertation, Southern Illinois University Carbondale, Carbondale.

Morley, Sylvanus G.

1938 *The Inscriptions of Peten*. Publication 437, Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

Proskouriakoff, Tatiana

1962 Civic and Religious Structures of Mayapan. In *Mayapan, Yucatan, Mexico*, Publication 619, edited by H. E. D. Pollock, R.L. Roys, T. Proskouriakoff and A. L. Smith, pp. 87-164. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

Pugh, Timothy W.

2009 Residential and Domestic Contexts at Zacpetén. In *The Kowoj: Identity, Migration, and Geopolitics in Late Postclassic Petén, Guatemala*, edited by P.M. Rice and D.S. Rice, pp. 173-191. University Press of Colorado, Boulder.

2019 From the Streets: Public and Private Space in an Early Maya City. *Journal of Archaeological Method and Theory* 26:967-997.

Pugh, Timothy W., and Evelyn M. Chan Nieto

2016 *Informe Preliminar Presentado al Instituto de Antropología e Historia de Guatemala de la Temporada de Investigación, Año 2015*. Proyecto Arqueológico Itza.

Pugh, Timothy W., Evelyn M. Chan Nieto, and Gabriela W. Zygađlo

2020 Faceless Hierarchy at Nixtun-Ch'ich', Peten, Guatemala. *Ancient Mesoamerica* 31(2):248-260.

Pugh, Timothy W., and Prudence M. Rice

2017 Early Urban Planning, Spatial Strategies, and the Maya Gridded City of Nixtun-Ch'ich', Petén, Guatemala. *Current Anthropology* 58(5):576-603.

Pugh, Timothy W., Prudence M. Rice, Evelyn Chan Nieto, and Don S. Rice

2016 A Chak'an Itza Center at Nixtun-Ch'ich', Petén, Guatemala. *Journal of Field Archaeology* 41(1):1-16.

Pugh, Timothy W., and Yuko Shiratori

2018 Postclassic Architectural Traditions and the Petén Itzas. In *Historical and Archaeological Perspectives on the Itzas of Petén, Guatemala*, edited by P.M. Rice and D.S. Rice, pp. 227-251. University Press of Colorado, Boulder.

Real Academia de la Historia

1900 *Colección de Documentos Inéditos Relativos al Descubrimiento, Conquista y Organización de las Antiguas Posesiones Españolas de Ultramar, 2da Serie*. Tomo 13: II Relaciones de Yucatán, Establecimiento Tipográfico "Sucesores de Rivadeneyra", Madrid.

Rice, Don S.

1985 The Peten Postclassic: A Settlement Perspective. In *Late Lowland Maya Civilization: Classic to Postclassic*, edited by J.A. Sabloff and E. W. Andrews V, pp. 301-344. SAR and University of New Mexico Press, Albuquerque.

Rice, Prudence M.

2009a Mound ZZ1, Nixtun-Ch'ich', Petén, Guatemala: Rescue Operations at a Long-Lived Structure in the Maya Lowlands. *Journal of Field Archaeology* 34:403-422.

2009b Incense Burners and Other Ritual Ceramics. In *The Kowoj: Identity, Migration, and Geopolitics in Late Postclassic Petén, Guatemala*, edited by P.M. Rice and D.S. Rice, pp. 276-312. University Press of Colorado, Boulder.

- 2018 Historical Perspectives on Tayza/Flores. In *Historical and Archaeological Perspectives on the Itzas of Petén, Guatemala*, edited by P.M. Rice and D.S. Rice, pp. 289-309. University Press of Colorado, Boulder.
- Rice, Prudence M., and Don S. Rice
- 2018 Introduction: The Itza Mayas and the Petén Itza Mayas, Their Environments and Their Neighbors. In *Historical and Archaeological Perspectives on the Itzas of Petén, Guatemala*, edited by P.M. Rice and D.S. Rice, pp. 5-27. University Press of Colorado, Boulder.
- Rice, Prudence M., Rómulo Sánchez Polo and Don S. Rice
- 2007 *Preliminary Report to on the 2006 and 2007 Field Seasons of Proyecto Arqueológico Itzá del Petén: The Site of Nixtun-Ch'ich'*. Instituto de Antropología e Historia de Guatemala, Guatemala City.
- Shiratori, Yuko
- 2020 Excavation at Nixtun-Ch'ich', Guatemala: Exploring the Material Culture of the Chak'an Itza. *Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto* 20:167-191.
- Smith, A. Ledyard.
- 1962 Residential and Associated Structures at Mayapan. In *Mayapan, Yucatan, Mexico*, Publication 619, edited by H. E. D. Pollock, R.L. Roys, T. Proskouriakoff and A.L. Smith, pp. 165-322. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
- Tokovinine, Alexandre, and Marc Zender
- 2013 The Lords of Windy Water: The Royal Court of Motul de San José in Classic Maya Interpretations. In *Motul de San José: Politics, History and Economy in a Classic Maya Polity*, edited by A.E. Foias and K.F. Emery, pp. 30-66. University Press of Florida, Gainesville.
- Tozzer, Alfred M.
- 1941 *Landa's Relación de las Cosas de Yucatán: A Translation*. Papers 18, Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Cambridge, MA.
- Villagutierre Soto-Mayor, Juan de.
- 1933[1701] *Historia de la Conquista de la Provincia de el Itza: Reduccion, y Progresos de la de el Lacandon, y Otras Naciones de Indios Barbaros, de las Mediaciones de el Reyno de Guatimala, a las Provincias de Yucatan, en la America Septentrional*. Biblioteca "Goathemala", Guatemala.

### 未公刊史料

Archivo General de Indias, Sevilla

Guatemala 151, no. 3. Testimonio de Zubiaur Irasi, 26 agosto 1696.

Guatemala 151BIS, no. 2. ff. 25v-26r, Certificación de los cabos y oficiales de guerra, 14 marzo 1697.

Escritanía de Cámara 339A, Consulta de Rivas y Pacheco, 20 junio 1703.

Escritanía de Cámara 339B, no. 15, Certificación de San Miguel y Figueroa, 1 julio 1703.

## The Postclassic Period at Nixtun-Ch'ich', Petén, Guatemala

—Views of the Postclassic Chak'an Itza from both Archaeological and Historical Data—

Yuko Shiratori

(JSPS Research Fellow / Institute of Latin-American Studies of Kyoto University of Foreign Studies)

Timothy W. Pugh

(Queens College, City University of New York)

Keywords: Maya, Postclassic period, Lake Petén Itzá, Chak'an Itza, architectural pattern, livelihood, Spanish documents

The archaeological site of Nixtun-Chi'ch' is located on the Candelaria Peninsula on the western side of Lake Petén Itzá, Guatemala. The site, covering over 2.5km<sup>2</sup>, has been intermittently excavated since 1995 and contains more than 450 buildings. These investigations have revealed the long-term occupation of the site from the Middle Preclassic (800-400/300 BCE) to the present. The site's Preclassic occupation was both intensive and extensive with the construction of many monumental structures and a gridded city plan. Unlike the abundant and recent coverage of the Preclassic period at Nixtun-Ch'ich', literature on the Postclassic period (950-1525 CE) is limited. This paper focuses on the Postclassic period whose occupations are scattered across the site above the Preclassic period constructions. The excavated Postclassic occupations are located outside of the central core of the site, mostly along the lakeshore. What was the situation at Nixtun-Ch'ich' during the Postclassic period? What was the livelihood? We believe that combining archeological data with historical documents allows for effective investigation. Using both archaeological data and Spanish historical documents from the sixteenth to eighteenth centuries we aim to answer these questions through a reconstruction of these architectural patterns and lifestyles of the people at Nixtun-Ch'ich' during the Postclassic period.

According to historical sources, at least three Spaniards passed through the Candelaria Peninsula and encountered the local inhabitants. The first was Hernán Cortés who passed through in 1525, and later Fray Andrés de Avendaño y Loyola in 1696. Both parties were on their way to meet the lord of the Itza, Ajaw Kan Ek'. The Itza was likely a confederacy composed of several factional lineage groups in the Petén lakes region. The inhabitants on the western side of Lake Peten Itza were called Chak'an Itza and were part of the Itza confederacy until the conquest of the Itza capital (Tayza or Nojpeten) in 1697. The other factions of the Itza confederacy included the Kowoj, who lived on the eastern side of the lake and were hostile to the Itza. We refer to Spanish documents from the conquest and colonial periods, since excavations revealed several European objects as well as a mission settlement.

In this paper, first we present archaeological data such as architectural patterns and ceramic assemblage from Nixtun-Ch'ich', focusing on the Postclassic period. The extensive site has been divided and labeled by sectors for the purpose of spatial control. Postclassic occupations have been identified in Sectors, CC, PP, QQ, WW, XX, and ZZ. We summarize the Postclassic and subsequent Contact-period findings from these sectors. It is noteworthy that recent research has provided radiocarbon dates from the eleventh to fifteenth centuries. Second, we describe the sociopolitical organization of the Itza during



the seventeenth century and present excerpts from Spanish documents that are related to the Chak'an Itza. Then, we discuss the correlation between the archaeological data and historical documents regarding the descriptions of Chak'an Itza. Finally, we define Chak'an Itza's "small village (*pueblecillo pequeño*)" and "settlement (*ranchería*)," and reconstruct Postclassic Chak'an Itza as a region composed of a number of those small villages and settlements with inhabitants, residing mainly on the lakeshore. These inhabitants engaged in milpas, fishing, and participated in warfare against other groups when needed. This research reveals both the lifestyle and livelihood of the Postclassic Chak'an Itza and contributes to our understanding of Itza factionalism and the confederacy around Lake Petén Itzá. Important future research includes both the discovery of more Postclassic burials as well as the accumulation of their data, which could reveal demographic data, as well as their foodways through isotopes.

原稿受領日 2021年5月20日  
原稿採択決定日 2021年9月4日

